



筑紫女学園大学リポジット

Preliminary Study for Constructing the Support Policy in our University, by Analyzing the Multiple Indices of Achievements in Learning and Personality Traits of the Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 暢祐, OGAWA, Nobumasa メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/288

或る学生コホートの学力や性格特性に関する多面的分析を通じた、 本学における Support Policy の枠組み構築への試論

小 川 暢 祐

Preliminary Study for Constructing the Support Policy in our University,
by Analyzing the Multiple Indices of Achievements in Learning
and Personality Traits of the Students

Nobumasa OGAWA

第1章 学生の学力は低下しているのか、さほど変わっていないのか、実際のところは？

～日暮し砵に向かい 心にうつりゆくよしなしごとを そこはかたなく書きつくれば～

本学に着任して、はや一年半が過ぎた。思い返せば、齢四十にしてついに恵まれた個人研究室、そのドアを開け、書籍や荷物の搬入など無我夢中の一日を終えて漸くひと息つくこうとした折しも、ぼろろん ぼろろん と校歌のメロディが流れてきたのだった。はじめのうちは、どこかで聴いた曲に似ているな、という漠然とした印象しかなかったが、程なく、Reinick の詩による Schumann の歌曲『ライン河畔の日曜日』と二重うつしとなり、纏れあいながら、現前から心の奥へとこだましていった。ふと窓外に目を遣ると、爛漫たる桜が夕陽を受け、桃色とも朱鷺色ともつかぬあわいに照り映えていた情景は、いまでも鮮やかに脳裡に甦る。

それから日を経ずして初めて教壇に立ったとき以来、折々の風情を味わう余裕もなく春夏秋冬は慌しく一巡した。けれども、こと一日の始まりと終わりに、流れる校歌に耳傾けるたび、私は初めに立ち返る。そして、流水のごとく私を浸し、去っていった学生たち、日々訪れてはまた去りゆく学生たちを慮り、学園の来し方と行く末に想いを馳せる。

再び意識は現実へと浮かびあがる。窓外に目をやる。筑女の森で、最後の蝉が夏の終わりをうたっている。温暖化のせいか季節は錯綜し、残り少なくなった桜の葉が、はらはらと、あるいは急くように舞い落ちていく。

と、小刻みな足音が廊下に響き、近づいてくる。足音は私の研究室の前で停まる。一瞬のためらうような間をおいて、不揃いなノック、そして

「せんせー、レポート遅くなってすいませーん、提出しにきましたあ！」

こうして私の思索は破られ、向かうべき現実へと引き戻されるのである。

～部屋を訪れた教員との対話～

学生への対応を済ませた後、ややあって二人目の来客である。今度は〇〇先生だ。最近ではそんなことも、ドアを開ける前から足音でわかるようになった。

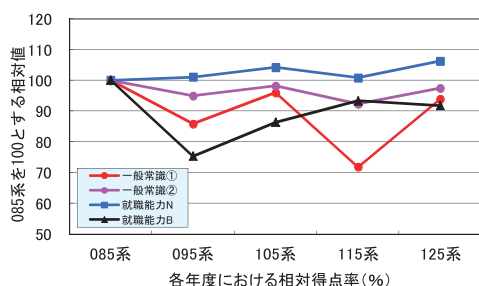
「あ、小川先生こんにちは。今お時間いいですか？ ちょっと訊きたいことがあってですね」

「どうもどうも。朝っぱらから先生こそお疲れさまです。立ち話もなんですから中へどうぞ」

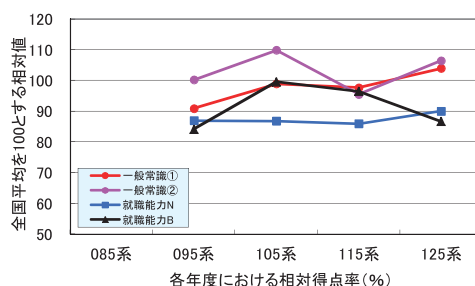
「ではお言葉に甘えて遠慮なく失礼して、と。実はですね、私がこっちに来はじめた頃と比べて、最近の学生の学力はずいぶん落ちてきているような気がするんだけど、実際のところどうなんでしょう？ この前も、ゼミの履修指導で蓋を開けてみたら前期で4単位も落としていて、そのぶん後期で埋め合わせないといけないのに本人はしゃあしゃあとしている、なんてことがあります」

「ウチも似たり寄ったりですよ。まずは、『学力』の内容と、『落ちてきている』実態を吟味するところから始めましょうか。数年間にわたる学生の学力推移に関し、全国平均との比較が可能な、それなりに客観性あるデータの分析にとりかかり始めたところです。このグラフを見てください。

グラフ1. 就職対策テスト4種の成績の年度別推移



グラフ2. 就職対策テスト4種の成績の年度別推移



左側のグラフ1は、現代教養学科の学生が進路支援課ルートで受験した、4種類の就職対策テストの成績の推移です。2008年度入学者から12年度入学者まで、最近5年間の学生について追っかけています。そうそう予め言っておきますと、僕は鉄道オタクなんで125系とか書きちゃってますが、これは現代教養学科12年度入学者の学籍番号「jc1205****」の略記なので悪しからず。他も同様です。で、学力が低下しているかどうかを単純比較できるように085系を100とした相対値で見ていると、確かに就職能力Bは095系、一般常識①は115系でガクッと下がっていますが、あとは若干の変動はあるものの、085系と比べてみて必ずしも右下がりになっているわけではない、つまり学力が単純に下がり続けているわけではない、ということです」

「でもこれってウチだけの話でしょ。毎回問題が違うから年によりバラつくのも当たり前では？」

「ご指摘ももっとも。他人事じゃあないですよ、自分が担当する科目の出題内容についても、成績評価についても、GPAもDPも。まあそのことはいずれ議論するとして、こういう全国規模の就職対策テストは、その性質上、あまりバラつかないように規格化・平準化されているもんです。そこで次に、各年度の全国平均点との関係で、ウチの学生の動向を見たのが右のグラフ2です。

このグラフから、次の3点を指摘できるでしょう。その1、就職能力Nは概して低空飛行であることから、ウチの学生は状況判断的な知能テストを苦手とする懸念がある。その2、一般常識①では上昇基調なのはよいとして、例年、程度の差こそあれ一般常識① $\leq$ 一般常識②、となっているのを考え合わせると、何らかの学習効果が働いている可能性がある。端的に言って、似たパターンの問題に対して反復学習させれば、それなりに解けるようになるかもしれない、という期待です。その3、就職能力Bが、105系をピークに115系でやや低下、125系で急落、というのが気になる」

「うーん、確かにそんな感じはする。でもその前に、なんで085系はデータが半端なの？」

「僕がデータをもらう前から、既に欠落してたんですよ。ずーっと同じようにデータを取り続けていればよかったのに。大学全体では、あれこれやっているけれど、一貫した方針がないせいか、全体を通してみると断片的で、すぐもったいない、と思うことがいっぱいあります。実は本稿も、

そんなバラバラのパズルのピースを掻き集めてきて、関連づけ、分析しようとしてるんです」

「ほお。その話は、おいおい聞かせてもらうことにしよう。で、結論として学生の学力レベルは、実はヤバい程までは下がってきていない、っていう理解でいいのかな？」

「あくまで統計上は。しかし一方、我々は統計学の限界について思いを致させねばなりません。分析結果そのものは単なる数字や文字列に過ぎないのであります。ちなみに先生は、先日配布された『2012年度学生による授業評価 調査結果報告書』、もうお読みになりました？ 重回帰分析やらテキストマイニングやら高度な分析技術が駆使されていますが、果たしてそのインプリケーションに如何ほどのものがあるのでしょうか、それこそ繁文縷礼玩物喪志というもんです。もっとも、こんな四字熟語は就職試験には出ないでしょうがね。いずれにしても、僕が本稿で、手計算や基本的なエクセル作業だけでやれることにこだわった理由の一つは、ここにあります。そもそも現代社会学たるもの、空疎な理論より生々しく多彩なりアリティの手応えこそ大切であって・・・こんな調子だと長くなるから、そろそろ話を深めちゃっていい？ 学会発表形式でいこうと思います」

～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．～．．．

では、表1から表4までをご覧ください。これらは、4種類の就職対策テストについて、得点を5点ごとに区分し、各階級の人数分布比率を年度ごとにあらわしたものです。

青地の枠は全国平均点が位置する階級、グレー地の枠は現代教養学科学生（以下、「現教」と略）のボリュームゾーン、概ね半数が分布する範囲です。そして、分布率のうち太字になっている部分は、現教の平均点が位置する得点階級です。

表1 就職能力N

	085系	095系	105系	115系	125系
71-75				4.7	3.1
66-70	2.7				
61-65	2.7	1.2	3.4	2.3	3.1
56-60	4.1	7.3	12.1	9.3	18.8
51-55	13.7	17.1	17.2	11.6	9.4
46-50	24.7	22.0	25.9	11.6	31.3
41-45	23.3	28.0	17.2	27.9	9.4
36-40	21.9	14.6	17.2	14.0	6.3
31-35	1.4	7.3	1.7	11.6	15.6
26-30	4.1	2.4	5.2	4.7	3.1
21-25	1.4			2.3	
16-20					
11-15					
6-10					
0-5					
計	100	100	100	100	100
現教平均点	44.9	45.4	46.8	45.3	47.8
現教ボリュームゾーン					
全国平均点	データ無	52.2	53.9	52.7	53.9

表2 就職能力B

	085系	095系	105系	115系	125系
66-70	1.3			2.2	
61-65	1.3			2.2	
56-60	1.3		1.4		
51-55	5.2	1.2	1.4	6.5	
46-50	13.0	3.6	4.1	6.5	17.6
41-45	26.0	9.6	19.2	13.0	23.5
36-40	27.3	8.4	21.9	21.7	26.5
31-35	13.0	20.5	20.5	26.1	8.8
26-30	7.8	24.1	20.5	8.7	8.8
21-25	2.6	20.5	6.8	8.7	5.9
16-20		12.0	2.7	4.3	8.8
11-15	1.3		1.4		
6-10					
0-5					
計	100	100	100	100	100
現教平均点	40.1	30.2	34.6	37.4	36.8
現教ボリュームゾーン					
全国平均点	データ無	35.9	34.8	38.8	42.5

表3 一般常識①

	085系	095系	105系	115系	125系
171-175					
166-170					
161-165					
156-160					
151-155					
146-150	2.6				
141-145			1.5		
136-140	2.6				
131-135	1.3			8.0	
126-130	2.6		3.0		
121-125	3.9	2.4	4.5	2.0	2.8
116-120	9.1	2.4	6.1	2.0	11.1
111-115	13.0	2.4	9.1	2.0	11.1
106-110	9.1	5.9	10.6	2.0	5.6
101-105	13.0	7.1	13.6	2.0	13.9
96-100	14.3	8.2	6.1		5.6
91-95	6.5	16.5	9.1	4.0	16.7
86-90	7.8	20.0	10.6	2.0	13.9
81-85	3.9	9.4	10.6	12.0	13.9
76-80	7.8	10.6	4.5	18.0	
71-75	1.3	3.5		8.0	2.8
66-70	1.3	8.2	7.6	6.0	
61-65		2.4	1.5	8.0	
56-60		1.2	1.5	14.0	
51-55				2.0	
46-50				4.0	2.8
41-45				4.0	
36-40					
31-35					
26-30					
21-25					
16-20					
11-15					
6-10					
0-5					
計	100	100	100	100	100
現教平均点	104.0	89.3	99.8	74.7	97.7
現教ボリュームゾーン					
全国平均点	データ無	98.2	100.9	76.5	94.0

表4 一般常識②

	085系	095系	105系	115系	125系
171-175	1.4				
166-170					
161-165					
156-160					
151-155			1.6		
146-150					
141-145	1.4				
136-140	4.1				
131-135	1.4	1.3		3.1	9.1
126-130	4.1	4.0	4.8	9.4	
121-125	4.1	1.3	4.8	3.1	3.0
116-120	12.2	9.3	9.7	6.3	3.0
111-115	8.1	9.3	12.9	3.1	15.2
106-110	10.8	13.3	14.5	6.3	6.1
101-105	14.9	10.7	11.3	12.5	12.1
96-100	5.4	14.7	11.3	12.5	15.2
91-95	13.5	10.7	4.8	3.1	21.2
86-90	6.8	10.7	9.7	12.5	9.1
81-85	4.1	4.0	8.1	3.1	6.1
76-80	8.1	5.3	1.6	9.4	
71-75		2.7	1.6	9.4	
66-70		2.7	3.2	3.1	
61-65					
56-60				3.1	
51-55					
46-50					
41-45					
36-40					
31-35					
26-30					
21-25					
16-20					
11-15					
6-10					
0-5					
計	100	100	100	100	100
現教平均点	105.7	100.4	103.9	97.6	103.1
現教ボリュームゾーン					
全国平均点	データ無	100.2	94.5	102.2	96.8

先のグラフ2で言及した通り、**表1 [就職能力N]**では、全国平均が例年51～55点内にある一方、現教平均は例年それをやや下回り、ボリュームゾーンも下方に位置しています。ここで注意すべきは、085系から115系にかけての得点分布が、各年度の平均値を中心とする正規分布すなわち釣鐘型分布に近い形だったのが、125系ではフタコブラクダ型、いわば学力の二極分化が窺われる概形を示していることです。また、115系で2人、125系で1人、飛びぬけて高得点の学生が存在していました。次に、**表2 [就職能力B]**について、現教平均では、年度により若干の変動が観察されますが、全国平均も同様の変動を示しており、概にこう、と言いきれる傾向はつかみにくいです。ただ、ここで一つ指摘したいのは、085系から115系にかけては現教平均・全国平均・ボリュームゾーンのどれに対しても、その上下ほぼ均等に得点分布があったのが、125系では上方の分布が消え、下方が多くなっている、という事実で、表1とも、ある意味符合する結果です。また、085系から115系にかけて、ごく少数ながら高得点者が存在したことも、あわせて指摘しておきます。

更に、**表3及び4 [一般常識①及び②]**へと考察を進めましょう。全国平均と似たりよったりで現教平均が推移しているのは、表3も表4も表2同様ですが、115系と、こと125系において、得点分布がフタコブラクダ型となる兆候を見せています。それから、ごく少数ながら085系と105系で、表2のように高得点者がいたことも、同じく指摘できます。次いで、表3と表4とを比較すると、表3 [一般常識①]より表4 [一般常識②]のほうで、得点分布が上側にシフトしているように見受けられます。このことについてですが、一般常識試験は①②とも同じスタイルなので、①のデキは普段からの学習努力や知識量、②のデキは、それに加えて①受験後の努力を反映する、だから②のほうが成績が上がっている、と言えれば丸く収まりそうですが、真相は異なるようです。むしろ、実態はより深刻かもしれません。実人数ベースで示した**表5**をご覧ください。

表5 就職対策テスト4種類の各年度受験者数

	085系	095系	105系	115系	125系
就職能力N	71	83	58	43	31
就職能力B	77	83	73	46	34
一般常識①	77	85	70	46	36
一般常識②	74	75	62	32	33

表6 就職対策テスト4種類を全て受けた学生の比率

	085系	095系	105系	115系	125系
学生在籍数(人)	120	125	124	74	64
4種を全て受験した人数	68	72	51	28	27
4種を全て受験した学生の比率(%)	56.7	57.6	41.1	37.8	42.2

5ヶ年いずれも①より②の受験者が少なくなっています。このうち、①受験者数と②受験者数の差が14人と最も大きい、一番最近に卒業したコホート(≒属性をほぼ等しくする集団)である115系について具体的に分析した結果、学生個々の情報開示は控えますが、①で低位すなわち平均ゾーン未達の19人のうち、②でも平均ゾーン未達だった学生は9人、②の受験をやめてしまった学生は9人、あわせて18人、という数字がでてきました(①は未受験で②だけを受験した学生も1人いるため、計算上ズレが生じています)。ちなみに、115系に次いで①②間の受験者数の差が大きかった095系も、同様のパターンを示しました。

どうやら、「元来修学意欲の低い学生はもとより、何かのはずみで低く評価されてしまった学生も、その後の修学意欲を低下させ、チャレンジの機会を見送ってしまう」という、ネガティブフィードバックが働いているようです。ことほどついでに**表6**もご覧ください。これは、就職対策テスト全4種類を漏れなく受けた学生の比率を、過去5ヶ年間にわたり示したものです。105系以降、受験率が4割前後へと急落している事実を読み取っていただけるでしょう。とすると、かつての[①で低位]⇒[②を受験せず]に相当する学生が、近年は最初から投了してしまっている、という見方もできそうです。いずれにせよ、②のほうは自信がある／意欲のある学生しか受けない、故に(全国平均点の変動を勘案しても概して)②の平均点のほうが①より高くなる、というカラクリです。

以上、ごく限られた内容の、しかし相応の客観性がある定量的データにまつわる検討を通じて、大雑把ながら次の仮説を導くこととなりました。

仮説 1. かつては、比較的良好にできる「優等生」が、それなりの人数は存在していた。だが近年は、絶滅危惧種並みとなってしまった。教職員に与えるインパクトが強い優等生の漸減が、「全体的に学力レベルが低下している」という印象形成に影響している可能性がある。

仮説 2. 概して、「できる学生は大体できる、できない学生は大体できない」というシンプルな話では済まされない、分野（科目等）別・ジャンル（知識／知能等）別の得手不得手の、著しい分極化が進行している懸念がある。

仮説 3. 本章での評価指標や学課成績等で掬いきれない水面下において、学力分極化以上の深刻度で、やる気やチャレンジ精神といった形で顕在化するパーソナリティ面での多様化も、進行している可能性がある。というのは、本章の分析は、学生が“自発的”に受験する就職対策テストに依拠する、あくまで限定的なものだからです。

これらをふまえ、今後の課題として、体系的かつ詳細な質的・量的データを可能な限り収集し、経時的かつ精緻な統合的検証を行っていく必要があると、私は考えます。

それにしても、2009年から2010年にかけて、いったい何があったのですかね？ この時期がクリティカルポイントであることは、一目瞭然でしょう。

～．

ちょうどその時、1 限終了を知らせるメロディが流れ始めた。〇〇先生は慌てて腰を上げる。「おお、もうこんな時間か、2 限に行かなくては。では、また後ほど。」

第 2 章 最近の学生に関する各種データの照合検討

慌しく行きかう足音、メロディ。そして 2 限が始まる。といっても、今日は私は講義がない。

並びの部屋の先生たちはいうに及ばず、大学で学ぶつもりのある学生なら誰しも、この時間帯は講義に出払っている。朝靄の名残をとどめる森の空気が、木漏日に輝く。開けた窓から金木犀の、えもいわれぬ匂いが漂ってくる。おお、私は汝を愛する。美しく静けさアカデメイアの午前よ！

早速、このゴールデンタイムに、一通りの検討を済ませることにしよう。どんなデータがあったかな、と呟きつつ、何冊かのファイルを取りだしてみる。

【ファイル I】就職対策テストや SPI 基礎力判定テスト等、学力関連データが意味するもの

そもそも就職対策テスト等の成績には、個々の学生を評価するうえで、どのような意味があるのだろうか。それを明らかにするため、各種テストの相互関係等に関し検討する。なお、紙数の都合やデータの限定性等の制約から、綿密な記述は別稿で行うこととし、以下端的に述べる。

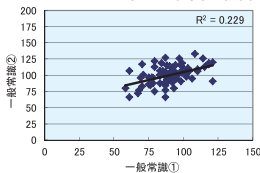
（i）就職対策テスト 4 種類間の相互関係と、その経年推移

データセットが揃っている 095 系から 125 系までの 4 系統に関し、テスト 4 種類間の決定係数 (R^2) を総当り（就職能力 N vs 就職能力 B、就職能力 N vs 一般常識①、就職能力 N vs 一般常識②、就職能力 B vs 一般常識①、就職能力 B vs 一般常識②、一般常識① vs 一般常識②）で算出した。

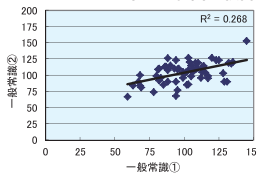
各系統とも、6 通りの組合せのうち決定係数が最大となったのは [一般常識①] vs [一般常識②] のみだった（あくまで決定係数値が最大ということであって、必ずしも高い相関があるということではない）。これは要するに、「多くの学生にとっては、テストのタイプごとに得手不得手があり、

デキる学生がまんべんなくデキるわけではない」ことを表すものといえよう。この、各年度の「一般常識①」vs「一般常識②」に存する関係を、グラフ3-1～3-4に示す。

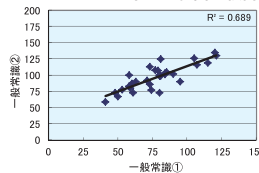
グラフ 3-1. 095 系での相関の検討



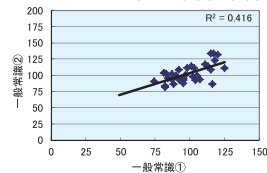
グラフ 3-2. 105 系での相関の検討



グラフ 3-3. 115 系での相関の検討



グラフ 3-4. 125 系での相関の検討



095・105系と比較して、115・125系で多少とも決定係数の高まりが見られることは、前章の後半で述べたこととも関連する。なお2回受験者において

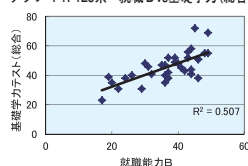
- ・①受験後に学習効果が働き、②で得点上昇する場合
- ・①が高得点で②も高得点（ただし①と同程度）のまま、或いは①が低得点で②も低得点のまま、つまり、学習効果が働かない場合
- ・①で高得点なのに②で低得点という具合に、学習内容の定着に不安定性がある場合

という多様なパターンが観察される。

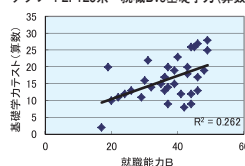
(ii) SPI 基礎力判定テストと就職対策テスト、学課成績等との関係

次いで12年度に全学科、13年度に現教のみを対象とし、4月上旬の新入生オリエンテーション期間に施行されたSPI 基礎力判定テスト（以下、『基礎学力テスト』と略）も交え、検討を広げる。ちなみに当該テストは、12年度のみ国語の第22問が欠落していたが、そのほかは国語・算数とも、12年度と13年度とで全く同じ設問である。結果は、グラフ4-1～4-3に示すごとく、125系においては就職能力Bのみ、基礎学力テストと相応の関係が観察された。また、基礎学力テストの国語の成績が、就職能力Bと、より関係していそうなのが明らかとなった。特に、国語30問中5問の文章題（整序・読解）の得点が、国語全体得点と関係することが観察された。ただし本来なら、寄与度等の概念を用い定量的に論述すべきところだが、本稿の性質上、曖昧な表現に留めおく。

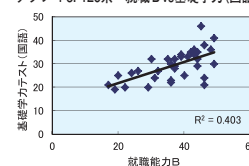
グラフ 4-1. 125系 就職B vs基礎学力(総合)



グラフ 4-2. 125系 就職Bvs基礎学力(算数)



グラフ 4-3. 125系 就職B vs基礎学力(国語)



長期欠席など特殊事情にも触れるため具体的記述は避けるが、実際のところ基礎学力テスト成績の高低は、2年前期までの段階の学課成績や履修状況とは、（直下に記す但し書きを除いて）全く関係がない。これらから、次の3点を指摘できる。すなわち、

- ・基礎学力テストの成績により大多数の学生の将来を予測することは、まず不可能である。ただし極端に得点の低い学生にあっては、入学後のアチーブメントも低いことは確かなようだ。
- ・基礎学力テストが就職能力Bとの微弱な相関を呈したのは、国語設問の相当部分が就職能力Bの語彙設問と類似で、しかも国語配点（60）が算数（30）の倍だったためと考えられる。
- ・基礎学力テストは、（業務受託者の講評の記載通り）コンセプトとしてもネーミングとしても「SPI 基礎力判定テスト」と銘打ちながら、実際には、各種就職対策テストの基礎的設問内容がバランスよく反映されている訳でもなく、「或る種の基礎学力に関する判定」に過ぎない。

(iii) いわゆる基礎学力に関する現代教養学科学生の相対的地位と、年度間推移

このような「基礎学力テスト」ではあるが、学内での「なにがしかの基礎的学力に関する一つの指標」として利用することは可能だろう。表7は、2ヶ年の両科目の帰属別平均点である。

表7

	国語	算数
全新生(12年度)	29.7	17.8
現代教養学科(125系)	28.9	15.6
現代教養学科(135系)	28.6	15.1

135系は、125系より低下しているが、1点以上の格差はない。一方、12年度全学生の平均より、国語で1.1点、算数で2.7点下回っている。このことから、「確かに学力が少々下がっているようだ」との印象を受けるはずだ。次に、現教生を軸に、科目ごと設問ごと、12年度入学者と13年度入学者を比較したのが表8-1～8-2である。国語・算数とも、12年度全新生の正解率が高い順に問題を並べ替えてある。*1の「125系-12全学」とは、[125系正解率] - [全新生正解率] のポイント差のことで(以下同様)、この値が正ということは、当該設問に対する現教12年入学生の正解率が、全新生の正解率を上回っていることを意味する。当然、負の値はその逆である。そして、現教生あるいは135系のほうがデキがよい(正值)設問は青地、デキが悪い(負値)設問は赤地で示し、絶対値が大きいほど濃色で塗っている。この表から、大雑把にいった次のような情報を読み取れる。すなわち、

- *1 12年度現教生は、同年入学の他学科生と比較して、算数が全般的に、しかも相当程度劣っている。国語は、全体正解率が低い(≒解けなくても構わない)設問では正解率が他学科生を上回るが、全体正解率が高い(≒解けなければいけない)設問で、相対的に劣っている。
- *2 現教について13生を12生と比較すると、算数では、正解率が高い(≒簡単な)設問の正答動向は上昇しているが、逆に正解率が低い(≒難しい)設問の正答動向が大幅低下、要するに「難しい問題」が解けなくなっている。国語では、正解すべき設問の誤答傾向が増している。
- *3 12年度欠落の国語第22問に関し、135系の正答率は73%であった。このことは、135系の国語平均点に、それに相当する分の底上げ効果が働いたことを意味する。換言するなら、12年度の学生と比較して、135系の国語平均点の下落幅は、実際は1.1点より大きかったことになる。

表8-1 基礎学力テスト(算数)

設問No.	12全学	125系	135系	*1	*2	*3
2	98.9	98.4	94.6	-0.5	-3.8	-4.3
5	87.4	81.3	81.1	-6.1	-0.2	-6.3
1	83.9	78.1	86.5	-5.8	8.4	2.6
10	82.5	75.0	78.4	-7.5	3.4	-4.1
8	81.2	81.3	81.1	0.1	-0.2	-0.1
17	80.3	76.6	78.4	-3.7	1.8	-1.9
9	76.1	76.6	75.7	0.5	-0.9	-0.4
21	74.6	51.6	62.2	-23.0	10.6	-12.4
7	73.6	71.9	73.0	-1.7	1.1	-0.6
6	71.7	73.4	67.8	1.7	-5.8	-4.1
14	69.8	53.1	45.9	-16.7	-7.2	-23.9
11	66.6	54.7	59.5	-11.9	4.8	-7.1
30	64.7	53.1	48.8	-11.6	-4.5	-16.1
20	63.3	48.4	51.4	-14.9	3.0	-11.9
12	61.1	39.1	48.6	-22.0	9.5	-12.5
23	60.1	57.8	43.2	-2.3	-14.6	-16.9
26	59.4	59.4	56.8	0.0	-2.6	-2.6
19	58.9	59.4	43.2	0.5	-16.2	-15.7
16	57.4	40.6	40.5	-16.8	-0.1	-16.9
3	56.9	51.6	43.2	-5.3	-8.4	-13.7
4	54.6	37.5	37.8	-17.1	0.3	-16.8
15	54.0	46.9	56.8	-7.1	9.9	2.8
24	53.6	43.8	43.2	-9.8	-0.6	-10.4
13	48.8	40.6	32.4	-8.2	-8.2	-16.4
22	47.6	34.4	40.5	-13.2	6.1	-7.1
18	37.7	39.1	18.9	1.4	-20.2	-18.8
28	29.3	31.3	13.5	2.0	-17.8	-15.8
29	12.6	12.5	5.4	-0.1	-7.1	-7.2
25	10.2	9.4	2.7	-0.8	-6.7	-7.5
27	7.5	4.7	2.7	-2.8	-2.0	-4.8

- *1 125系正解率-12全新生正解率
- *2 135系正解率-125系正解率
- *3 135系正解率-12全新生正解率

表8-2 基礎学力テスト(国語)その1

設問No.	12全学	125系	135系	*1	*2	*3
23	96.1	98.4	94.6	2.3	-3.8	-1.5
29	91.5	87.5	86.5	-4.0	-1.0	-5.0
6	90.6	89.1	91.9	-1.5	2.8	1.3
37	90.4	87.5	81.1	-2.9	-6.4	-9.3
24	88.0	82.8	81.1	-5.2	-1.7	-6.9
40	86.4	90.6	86.5	4.2	-4.1	0.1
20	85.4	81.3	83.8	-4.1	2.5	-1.6
39	82.8	81.3	73.0	-1.5	-8.3	-9.8
58(2)	82.0	79.7	83.8	-2.3	4.1	1.8
21	79.8	76.6	70.3	-3.2	-6.3	-9.5
2	79.2	82.8	75.7	3.6	-7.1	-3.5
45	79.2	76.6	81.1	-2.6	4.5	1.9
27	78.7	71.9	62.2	-6.8	-9.7	-16.5
59	78.2	76.6	67.6	-1.6	-9.0	-10.6
53	77.1	78.1	75.7	1.0	-2.4	-1.4
34	73.4	68.8	64.8	-4.6	-3.9	-8.5
58(1)	73.1	71.9	64.8	-1.2	-7.0	-8.2
10	70.9	75.0	54.1	4.1	-20.9	-16.8
18	68.5	67.2	56.8	-1.3	-10.4	-11.7
36	63.3	70.3	62.2	7.0	-8.1	-1.1
17	62.6	59.4	54.1	-3.2	-5.3	-8.5
41	60.6	56.3	51.4	-4.3	-4.9	-9.2
28	58.1	51.6	43.2	-6.5	-8.4	-14.9
32	58.0	54.7	62.2	-3.3	7.5	4.2
31	57.2	46.9	48.6	-10.3	1.7	-8.6
38	56.7	64.1	43.2	7.4	-20.9	-13.5
11	55.6	56.3	45.9	0.7	-10.4	-9.7
26	54.4	53.1	48.6	-1.3	-4.5	-5.8
25	53.7	54.7	54.1	1.0	-0.6	0.4
57	53.7	50.0	40.5	-3.7	-9.5	-13.2

その2

設問No.	12全学	125系	135系	*1	*2	*3
44	49.6	40.6	54.1	-9.0	13.5	4.5
42	47.6	50.0	48.6	2.4	-1.4	1.0
13	45.0	45.3	35.1	0.3	-10.2	-9.9
56	44.6	42.2	40.5	-2.4	-1.7	-4.1
1	44.0	31.3	40.5	-12.7	9.2	-3.5
6	41.0	35.9	54.1	-5.1	18.2	13.1
48	40.9	39.1	54.1	-1.8	15.0	13.2
52	37.0	31.3	43.2	-5.7	11.9	6.2
16	36.0	43.8	40.5	7.8	-3.3	4.5
55	35.2	37.5	21.6	2.3	-15.9	-13.6
9	33.7	29.7	24.3	-4.0	-5.4	-9.4
33	31.0	31.3	32.4	0.3	1.1	1.4
54	30.7	25.0	32.4	-5.7	7.4	1.7
15	30.0	29.7	29.7	-0.3	0.0	-0.3
7	29.6	23.4	37.8	-6.2	14.4	8.2
19	29.6	20.3	40.5	-9.3	20.2	10.9
4	29.1	37.5	27.0	8.4	-10.5	-2.1
12	22.9	23.4	27.0	0.5	3.6	4.1
43	18.7	18.8	21.6	0.1	2.8	2.9
8	16.8	14.1	18.9	-2.7	4.8	2.1
51	16.8	17.2	5.4	0.4	-11.8	-11.4
3	14.6	10.9	2.7	-3.7	-8.2	-11.9
50	14.6	10.9	8.1	-3.7	-2.8	-6.5
14	13.6	17.2	13.5	3.6	-3.7	-0.1
35	11.2	17.2	18.9	6.0	1.7	7.7
47	8.4	3.1	2.7	-5.3	-0.4	-5.7
46	7.4	10.9	13.5	3.5	2.6	6.1
49	4.5	7.8	5.4	3.3	-2.4	0.9
30	4.0	4.7	0.0	0.7	-4.7	-4.0
22	-	-	73.0	-	-	-

以上をふまえ、暫定的に、以下の通り結論づけることとしたい。

少なくとも最近の現代教養学科学生について、基礎学力テストや就職対策テスト等の成績に着目すると、経年的に、学力の相対的低下と、学生間分極化が進んでいる可能性が推測されたが、更に、「平均点」のような量的指標の陰で「誰でも解けるはずの設問さえ解けなくなっている（国語）」「少し難しい設問にも歯が立たず、正解できなくなっている（算数）」といった質的側面で、学力格差が深化の度を増している懸念がある、という新たな問題の存在が明らかになった。これらの議論を通じ、第1章『部屋を訪れた教員との対話』冒頭で記した「最近の学生の学力はずいぶん落ちてきているような気がする」という印象と、第1章末尾の仮説1及び仮説2とに関する立証を、完全とまではいかずとも、或る程度行えたものとする。なお、仮説2及び仮説3の双方に係る傍証の一部は、9月18日開催の『理念と目標発表会』にて現代教養学科分として報告されているので、学内関係者は筑女ネット上で閲覧されたい。学外には公表しがたい部分がある。

このような特性を有する学生に対し、「本学において何を最低限の必須事項として位置づけ、サポートプログラムや各講義での具体的教育内容として精選し、確実に習得させるか」が、SP、CP及びDPとの密接な関連のもと、至急検討されねばならないだろう。

なお、本調査研究の一環として、2013年4月中旬、135系の約8割を対象に『厚生労働省編 一般職業適性検査』を施行していることを付記する。

【ファイルⅡ】何が学生のパフォーマンスを左右するのか？ ～仮説3.に係る135系のデータ

本調査は現在も継続中であることや、被験者が在学中であること等の事情から、詳細は時宜を見計らい改めて論ずることとし、ここでは概略のみ記載する。調査対象は135系の全37名中、私が担当する必修選択科目『食と健康』受講者の31名である。

表9は主に、『食と健康』における着席記録である。5月中までは、毎回シャッフルして座席指定していたが、6月7日以降は自由席とし、出席をとる際に着席位置を記録した。5月21日基礎ゼミの時点で既にグループ（色別表示）が形成され、以降、定期試験まで持続する様子が窺える。入学直後という比較的刺激が大きい短期間に、新しい人間関係や方向性が形成され、以降は固着してしまう。グループ形成の一次的要因は、意外にも「学籍番号の近さ」のようだ。複数の学生に尋ねたところ、新入生オリエンテーション期間中の食事会におけるテーブル別グループが、ずっと維持されているとのことだった。仲間を見つけ、一旦グループ／セルが形成されると、それがゼミ選択まで続く。ただし、グループ形成の二次的要因やサブグループの形成要因は、SPI2性格適性検査（リクルート社製）をふまえた模擬版で判別される性格類型と何らかの関連があるようだ（表10）。因子分析により、グループ間で回答内容に著しい差異のある質問項目が複数見出されたため、今後、質問内容の類似性が比較的高いY-G検査など、より信頼性の高い心理テストも併せて検討を進める方針である。ともかくSPI2性格適性検査模擬版では、「自信性の低さ」と「気分性・高揚性の高さ」とが特徴的といえる。表11は、内田クレベリン検査（標準型；判定及びデータ提供元は福岡心理テストセンター）の結果である。表中の色別表示は、表9及び表10とは関係なく、内田クレベリン検査の性格類型判定で用いられる配色を踏襲している。全国大学・短大平均と比較されたい。幅広いゾーンに学生が分布することも注目に値するが、特に燈・桃色塗色部の比率の高さは、小規模学科だからこそその肌理細やかな指導の重要性を示唆するものといえる。なお仄聞によれば、さる就職対策講座の学外講師が、受講者に対し任意でのクレベリン検査受検を募っているとのこと。このような面においても一元化とデータ集約化の利益は大きいだろう。

表9 グループ別の着席記録と成績分布

5月21日
コンピューター演習室2 6月7日

5月21日 コンピューター演習室2	6月7日	6月14日	6月21日	6月28日	7月5日	7月12日	7月19日	7月26日	定期試験時
東									
北									
中									
南									
西									
東									
北									
中									
南									
西									

表10 SPI 2 性格適性検査による検討結果：グループ別類型

東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西

全体的性向

全体的性向	平均点	STDEV
気分性	6.8	1.88
内省性	6.1	2.26
高揚性	6.1	2.23
身体活動性	5.9	2.43
持続性	5.9	2.46
慎重性	5.2	2.03
自責性	5.1	2.26
敏感性	4.9	2.19
社会的内向性	4.5	2.57
達成意欲	4.3	2.02
活動意欲	4.1	2.13
独自性	3.7	2.36
自信性	2.8	2.13
虚偽性	0.9	1.09
感情⇄思考	6.0	1.48
知覚⇄判断	4.5	1.72
内面⇄外面	4.2	1.99
直観⇄感覚	3.6	2.31

参考資料：GPAとグループ構成員分布

東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西
東	北	中	南	西	東	北	中	南	西

表11 内田クレペリン検査(標準型)に係るデータ

2012年度全国大学平均分布率 n=1270

1	1.7	5.0	12.0	4.6	1.8	0.6
2	1.1	3.8	23.0	12.5	5.9	1.5
3	0.1	1.3	9.8	6.4	2.4	1.7
4	0.0	0.1	0.9	1.6	0.4	0.6
5				0.0	0.1	0.0
6						1.2
合計	2.8	10.1	45.7	25.1	10.6	5.7
	46.5	24.9	11.3	8.8	8.5	100.0

2012年度全国短大平均分布率 n=810

1	0.6	3.7	9.6	3.2	1.5	0.5
2	0.5	4.9	18.9	11.6	5.9	1.2
3	0.1	1.4	14.3	10.5	3.8	2.2
4	0.0	0.0	1.2	2.0	1.2	0.4
5				0.0	0.0	0.0
6						0.6
合計	1.2	10.0	44.1	27.3	12.5	4.9
	38.3	22.2	16.8	13.7	10.0	100.0

135系分布率 n=31

1	0.0	6.3	6.3	3.1	0.0	0.0
2	0.0	3.1	18.8	25.0	0.0	3.1
3	0.0	0.0	3.1	9.4	3.1	6.3
4	0.0	0.0	0.0	6.3	0.0	3.1
5				0.0	0.0	0.0
6						0.0
合計	0.0	9.4	28.1	46.9	3.1	12.5
	34.4	31.3	3.1	15.6	15.6	100.0

本章の最後に、このようなパーソナリティ検査の類にまで検討を広げた経緯を、かいつまんで述べる。私は2012年4月に着任して以来、官能評価演習はじめ食品学関連科目群を担当する中で、感覚統合上の困難がみられる学生が多いことに気付いた。たとえば、食品風味に関する表現の不的確性や、ブラインドテストでの再認・再現率の低さ等である。元来の専門である生理学との関連のもと味覚検査を行ったところ、反復刺激に対する閾値上昇が目立った。これは端的にいて、根気が続かず、トレーニングの効果が表れにくい、ということである。背後要因として、生活経験の少なさや学習意欲の低さ、栄養面のアンバランスばかりでなく、感覚発達の偏位や情報入出力の不安定性、学習上の可塑性の障害さえもが推測されたことから、調査研究に着手したものである。

ここまで記述した内容が、部分的にせよ示唆するのは、大学入学後の教育・学習を通じて比較的容易に習得させられるものとは相容れ難い、学生の資質にまつわる或る側面といえよう。現代教養学科生を妥当なサンプルと看做しうるか否かの厳密な議論は今は措くとしても、学生選抜の態様が、どの学科もおしなべて似たものとなっている以上、十分に他山の石たりうるだろう。この類の検査が企業等の採用選考の場でも多く用いられる現状に照らすなら、そして本学が学校法人の格に留まり続けるつもりなら、私達は驕ることなく、自らの教育サービスを通じて達成可能な「こと／もの／ひと」を的確に峻別・選択し、「できること」に最大限の努力と資源とを集中させるべきだ。理想論や皮算用ばかりでは、教育機関としての社会的責任を全うし、人材育成等の面での出口実績を高めることはできまい。ただし学生一人ひとりには私達にとって、対象であると同時に、かけがえのない主体でもあることを、自戒をこめて強調しておきたい。本稿で提示する学力・パーソナリティに関する各種データが、よりよいAPやSP等の策定に裨益するならば幸いである。

とか嫌だとか言ってる訳じゃないんですよ。同じ講義を受けていても、後ろのほうで寝ていたり、携帯とかしてる学生が結構います。そういうのは放っとけばいいとして、私語うるさいのや出入りが多いのがすごく邪魔なんです。本気で勉強したいと思っている真面目な学生のほうが、ギャル系のコ達より肩身狭い思いをしなくちゃいけないのって、ちょっとヘンじゃないですか？」

「類は友呼ぶ、朱に交われば赤くなる。君は心理コースだったっけ。それなら、『某女子大学における生態的種分化の共依存性について』なんて卒論、どうだい？ 本音をいえば、学生がそんな調子だから僕らも楽ちん、って面はあるんだよ。適当にゲタ履かせて成績つけとけば、文句がでないどころか却って喜んで貰えるくらいだし、別にそれで自分の懐が痛むのでもないし。その結果は、といえば藩札乱発みたいな凄惨なハイパーインフレでさ、もうCは1円、Bは10円ほどの値打ちもないもんな。ヘタにBでもつけちゃった日には、バカにしてる、なんて逆ギレされるのも困るし、かといって先生同士でお互い手の内を見せ合うこともないから、僕ら、いつの間にか、なんとも倒錯的な“囚人のジレンマ”にハマっちゃってるわけ。いったい、誰に何をどれだけあげるのか、誰が何をどれだけ手に入れるのか。少し前、“ハーバード白熱教室”がきっかけで正義論が流行ったけど、そんな問題意識に立って、分配的正義とか、メフィストフェレスやアリストテレスとかまで遡って勉強してみなさい。レポートを提出したら、Sどころか“P”レミアムをつけてあげよう。

冗談はこのくらいにして、僕もそろそろ文学部の唯野教授と共著論文でも書き始めるとしようかねえ・・・あっ、もう3限じゃないか」

第4章 Missing piece “S”P of our puzzle – What should it be? Is it really worth “S”? ～“B”reeding Policy among the continuous series of such policies as Admission, Curriculum, Diploma, Education, Faculty.

きわめて雑駁ながらここまで描出したごとく、本学に在籍する学生は、実に多様だといってよい。そのような学生に対し、いかなるサポートポリシー（以下、「SP」と略）が提示されるべきだろうか。全ての学生がサポートを望んでいるか、の議論はさておき、現状概括から始める。

『平成25年度 基本理念と教育目標 ―教学マネジメント・サイクル確立のために―』（以下、『理念と目標』と略）に、SPに関する記載がある。AP（Admission Policy）とCP（Curriculum Policy）とを架橋するものと位置づけられながら“未完結”となっている（p.7）。更に、新入生サポートプログラムとして入学前教育・リメディアル教育からキャリア教育にかけて7項目が掲げられているが、リメディアル教育については、“導入検討中”である（p.8-9）。そして、これらの状況は、平成23年度版で初出して以来、最新の平成25年度版でも一字一句変わっていない。短大の学生がまるまる入れ替わってしまうほどの長期にわたり、こうした放置状態が続いているのは、果たしているかがなものでしょうか。更に付言すれば、p.1で“本学独自”と謳う肝心要の部分がペンディング中であるにもかかわらず、表紙見返し『活用及び取扱い上の注意』で、わざわざ下線までつけて、当該箇所を含む前半部分を“広く社会に明示することを目的とします”と記載していることなど、本学のスピード感や情報管理乃至広報体制に改善の余地があることを示すものだろう。

先に第1章で、「大学全体では、あれこれやっているけれど、一貫した方針がないせいか、全体を通してみると断片的」と記した。これはもはや、就職対策テストや基礎学力テストだけに留まる問題ではない。敢えて言うなら、Admission, Curriculum, Diploma, Education, Faculty等々、筑女全体の各policy間に本来存すべきインテグリティが、あらゆる面で毀損の度を深めているように私には感じられる。確かに、部署・学科等ごとでは、部分最適は図られているだろう。だが、その

総和が必ずしも全体最適を実現することにはならない。いわば、Corporate Identity 喪失と通底する、“サンガ”解体危機の問題である。実のところ、内心では多くの教職員が、いろいろな事にうっすらと、或いははっきりと気付いているはずだ。しかしながら、誰も自分から言いだそうとしない。いちいち意見提起する暇はない。うるさい奴と思われるのは嫌だ。言いだしっぺでやらされるのは面倒だ・・・理由は各人各様ながら、結局は「何だかんだ言っても、いつの間にかどこかで決まるわけだし、既定路線が変更されることも殆どない。定年まで、或いは次の行先が見つかるまで自分の職責をソツなくこなし平穩無事にやり過ごそう」、そんな甘えや口先だけの問題意識、おごなりの仕事が蔓延し、それらの総和の上に、学園全体が緩慢なる定年へと歩みを進めているようだ。

一方で、というか、その補完／代替機能として、というべきか、東京の地下鉄のように重層的で錯綜した、obscure で sticky な community や network が学内外に張りめぐらされ、人がシステムを動かしているのかシステムに人が動かされているのか、そもそもそのシステム自体も何なのか、お互いにわからなくなってしまうている。そして一個の教育経営体として、学生の実態や競争環境の変化などに、統合性を保ったままで適応することができていない。その帰結として、(指標によりけりではあるが) 坂を転げ落ちるように事態が悪くなっていくのを誰も止められない。これが学園の現実ではないだろうか。仮に、事態がどんどん悪くなる、というのが言い過ぎとしても、このままでよいと考える教職員は、果たしてどのくらいいるのだろうか。来るべき危機に備える必要は、既に1997・98年度及び1999・2000年度の『自己点検・評価報告書』でも言及されていた。

選択肢やヒントは多々あるだろう。たとえば民間企業に準じたラディカルな scrap-and-build やリストラ、あるいは、米国のコミュニティ・カレッジに範をとる縮小均衡への転換、等々である。むろん、“実質全入”や“大学間競争激化”、“ゆとり教育のどん底”といった AP 関連の検討、教職員・学生を問わず一貫する信頼と CI の醸成も不可避だが、ここでは SP に絞りを進めたい。

一木一草の多彩な個性や意思等が尊重される土壤に、一本の柱を立てる。その上方に、＜社会における大学のあり方＞に関するマクロな議論、中の上あたりに＜筑女における学部・学科・コース＞、中の下あたりに＜ゼミ等＞、さらに下方に、＜個々の学生のパーソナリティや学力＞等に応じたミクロな指導方策を位置づける。そして、一本の横桁の左方に学園創立時を、右方に学園100年の大計を置くこととする。その中間に現在の筑女があり、柱と桁の結節点には、＜適切にグループ化された学生群（類型）＞及び＜在学生＞＜新入生＞＜入学志望者＞というメソ的要素を置くことができるだろう。この、低年次生から15年度入学生あたりに当面の照準を定めて、＜適切にグループ化された学生群（類型）＞のそれぞれにマッチした簡潔な SP を策定し、明確なサポートプログラム（以下、小文字『sp』と略）を施行すべきだと、私は考える。というのは、「ユニバーサル段階を迎え、入学者の選抜方法が多様化する中で、学生の学力・学習意欲には従来以上の差異が生じており、多くの大学では現実と3つのポリシー（註：AP、CP 及び DP）の維持との間でジレンマが生じています」（『理念と目標』p.7）という状況ゆえ、全学生を普遍的 SP 下に一律に包摂しようとすればするほど却って多元的な下位 sp を用意する必要性が増し、それとともに全体調整の困難度も高まり、先述のごとき本学固有の事情と相俟って、いつまでたっても決められない、決まらない状況に立ち至る。そうした事態を回避し、可能な限り即効的に好循環に転換させるためだ。

この場合、「学生群（類型）に応じた格差的取り扱い」は許容されうるか？、という疑問や批判がありえるだろう。そのような指摘に対し、私は、本学において仏教なかんずく建学の精神などコアポリシーの更なる実体化と、いっぼうで思想・哲学としての相対化とが目指されるべきことを前提に、「許容されうる」と答え、翻って反問しよう。

一つ、修学意欲やアチーブメントが高い学生に対し、それらが低い学生と同等の扱いをすることは如何？ そのような学生は、いかに報われるべきか、或いは報われなくてよいのか？

二つ、修学意欲やアチーブメントが低い学生に対し、それらが高い学生と同等の扱いをすることは如何？ 斯くなる美酒を何故飲まぬのか、と下戸に強要するようなものではないか？

三つ、入試において、求める学生像や学力など、人材の将来にまつわる資質に関する AP は、中学・高校という過去の学業実績や定員条件等の形式面と比し、適切に運用されているか？ そして入学後の学生に対し、CP・DP も一定程度の合理性と compatibility をもって運用されているか？

APとCP・DPの不整合による齟齬をくらはうのは、期待して入学した学生と、現場の教職員である。

ゲーテの『ファウスト』。彼の苦悩は、唯一人グレートヒェンさえ救いえなかったことによるのではない。といって何人がかりだとしても、世々代々の彼女達を、全て救いきれるわけでもない。せめてできることといえば、その場その時々で、いかなるファウスト達がいかなるグレートヒェン達を救い、自らも救われるか、だろう。まさに“聖道の慈悲”の限界を思いつつ、私は、自らもゆるされてここに在る、本学において数少ない任期付き教員の一人として、「格差的な教育資源配分は許容されるか？」という問に対し、それが、学生その人に対してでなく学生群（類型）に対してであり、成長に伴う群（類型）間の移動も当然前提とする限定のもと、あくまで政策的・経営的観点から、「利益は不利益を上回るはずであり、許容・推進すべきだ」と主張する。

以上の理念的検討をふまえ、望まれる SP の概略を世俗的に記述するなら、次のようになろう。
【相応に真面目でソツなく卒業したい、という学生】インターンシップ等を通じ、早めにキャリアプランを固めます。ビジネスマナーや実務資格に役立つ有料講習会が盛り沢山。小・中・高のリメディアル教育でコンプレックスも解消。校威発揚に直結する課外活動も応援します・・・

【意欲があって学業優秀な学生】ダブル担任のゼミで懇切指導。花形資格の取得や有名企業への就職を徹底サポート。筑女 HP や『大学案内』でも活躍してもらいます。実質的なボランティア経験や幅広い教養を身につけた、徳性豊かな女性をめざします・・・

これはほんのイメージでしかないが、学生群（類型）に応じた暫定的 sp の施行によって、先述の“ジレンマ”は過渡的にポリレンマ化するものの、やがて個々のレンマはその相同性／差異性に基づき、相互作用を経て限られたセットのクラスターへと集約されていくため、最終的に、比較的簡素な sp と SP に到着するはずだ。そして、具体的な学生像をふまえた SP の定立は、今は断片に留まる AP や CP、DP のトランスフォーメーションを促し、有機的な総体への道を開くだろう。それが“校風”というものだ。

そもそも入学を admit した(してしまった)以上は、大学には、全ての学生に対し、恙無く diploma を取得させ、より良い将来へとバックアップする責務がある。新たな視点も織り込んだ確固たる AP を礎の一つとし、それらを繋ぐ最善の curriculum と support 体制とを早急に構築する覚悟が、いま本学に問われている。そして本学もまた、自らが適者生存・繁栄の今日的好例を示すことによって始めて、現代教養あるいは現代社会学を標榜することへの信頼を獲得できるだろう。ただしそれも、あくまで、大学の本旨、本学の建学精神の実現に至るための過渡的措置／方便にすぎないことは、改めて言うまでもない。

問題提起を主眼とする本稿も、はや紙数が尽きた。蒐集データに関する詳細な分析と、本学にふさわしく、かつ一般化可能な SP 等に関する考察については、稿を改めて論ずることとする。

〈謝辞〉現代教養学科はじめ本学教職員の、公私にわたる日頃よりのご支援ご厚誼に謹んで深謝します。また、本稿の校訂過程でご助力くださった方々と、各種データ入力・処理作業及び有意義なディスカッションに対し協力を惜しまなかった3名の学生に、謝意を表します。

(おがわ のぶまさ：現代教養学科 准教授)